作品名 防災チャットボット EYE

齋藤　仁志

―毎日、少しずつ防災知識のストックを！―

キーワード　チャットボット、防災知識、避難行動判定フロー

【公助の限界】東日本大震災では、行政機関が被災し、機能が麻痺してしまい、行政が全ての被災者を迅速に支援することが難しいことが明確になった。

【人々の災害に対する認識】災害発生時は、防災に対する認識は高くなるが、時が過ぎると忘れられていってしまう。

災害が起こりえないデジタル空間に司令塔となるものを開発し、毎日、少しずつ防災知識をストックしていき、自助・共助・公助を支える仕組みは作れないか？

防災チャットボット「EYE」誕生！

・５項目の内容を教えてくれる（防災知識②、備蓄、避難行動、災害体験談）。

・朝、昼、晩と話す内容が変わる。

・工夫された GUI
　避難行動では、RGP ゲーム感覚
　災害体験談は、本をめくるように

・通勤時、お昼ご飯など、すき間時間に防災について理解を深めることができる。

・２週間程度で、ひと通りの防災知識をストック可能。

・いざというときにどのように行動したら良いのか、何が必要なのか、教えてくれる仕組み。

【調べる機能】雨雲レーダー、日本全国避難場所マップ、自然災害伝承碑など、数多くのマップを搭載。日本全国避難場所マップでは、全国 10 万カ所以上の場所を一つのマップに載せることに成功した。避難行動判定フローは、家族・世帯構成により、どの警戒レベルで避難すべきか、質問形式で簡単にわかるような機能になっている。

【今後の展望】

・ChatGPT と併用し、デジタル空間に司令塔となるチャットボットを完成させる。

・オープンデータ化／オープンソース化
　自治体・民間企業が簡単にチャットボットを導入できるように、オープンソースを公開予定。